

## 三重県立熊野古道センター

終身正会員 戸尾任宏君  
正会員 梅沢良三君

三重県立熊野古道センターは、2004年に熊野古道が「紀伊山地の霊場と参詣道」としてユネスコの世界遺産に登録されたのを機に「伊勢路」の拠点施設として計画された施設である。設計者は「木の香りあふれる象徴的建築」をテーマに公募されたプロポーザルコンペによって選ばれた。

この建築の特色を一言で言えば、同一断面（135mm角）の尾鷲檜の無垢材を組み合わせた構法 - 「等断面集積木造構法」 - によって、木造大空間を創出していることである。ステンレスボルトとリングを用いて組柱、組梁、組壁を構成し、トラスや集成材を使わないで、柱間 10.5m、軒高 6.7m という“歴史的木造大空間を凌ぐ空間”を創り出している。基本構造ユニットの組み立てはすべて工場で行い、現場では手慣れた伝統工法で施工できるように設計されている。さらに将来の部材の取り替えが可能となるように構法の単純化が徹底的に検討されるなど、建築のサステナビリティも追求されている。

構造材として地場産材、尾鷲檜の樹齢 60～80 年の中径木 6,549 本が、天井板として地元熊野杉 2,280 m<sup>3</sup>分が使われているが、伐採後の山林では植林が計画的に行われるなど、循環型森林管理が地元林業家との連携によって着実に実践されている。

施設は、展示棟、交流棟、研究収蔵棟の 3 棟に分けてまとめられ、大空間である展示スペースと交流スペースを主空間として、この周りに関連諸室を配した“おらかな”平面構成とすることによって要求の変化に対応させている。構造部材の組柱、組梁、組壁がそのままあらわしとなった白木の内・外観は、端正で細やかな日本建築の伝統的意匠が表現されたものとなっている。またボリュームの大きな展示棟と交流棟の対称的配置と軒の深い直線的な造形が相俟って、この建物の象徴性と力強さをより一層強調している。

アプローチに立って見ると、尾鷲港を挟んで、熊野古道伊勢路の代表的古道である「馬越峠」と対峙するこの建築の大景観は美しく、すがすがしい。また NPO による運営も順調で、2007 年度には 12 万人を越す利用があった。体験学習教室や野外交流イベント、企画展などが定期的に催されるなど、センターを拠点とした幅広い活動が繰り広げられている。

以上、この建築は、世界遺産熊野古道の記念施設としての象徴性を巧みに際だたせながら、生産性や持続性など多様な側面を考慮した構造的・構法的提案を通して、中径木活用促進のモデル建築を創り出しており、この社会的意味は大きい。

よって、ここに作品選奨を贈るものである。